



二〇二三年の今年  
オケクラフトは誕生から四十年を迎えます  
オケクラフトを取り巻く様々な関係性を  
「もっと知っていただきたい」とはじめた  
「森林工芸館のあれこれ」は  
みなさんの  
「おもしろい」「もっと知りたい」に  
つながっているでしょうか  
二〇二三年最初の一号は  
オケクラフトの生みの親である  
秋岡芳夫さんが提唱した  
「二器多用」という言葉を取り上げます  
日々の生活が見直されるようになったこの数年  
今だからこそ 知っておきたい  
秋岡さんが大切にしたい  
「モノと暮らしの関係性」とは何だったのか  
その考え方に ふれていきたいと思えます

一器多用

- いっきたよう -

自らを立ち止まったデザイナーと称した秋岡さん  
その思いは昔の日本に見られた  
「こころの裕福さ」につながっているように思います



人と、木と、おけと



【一器多用 - いっきたよう -】

【一器多用】という言葉は、1971年「もっと暮らしの中にクラフトを」というキャッチフレーズのもと、秋岡さんとグループモノ・モノが最初に企画した展覧会『今日のクラフト展 - 暮らしの提案』の中で生まれた造語です。

長く使えるいい器を探して、いろいろに工夫して使おう！との意味を簡潔な言葉で表す表現として使用されました。会場に置かれたパンフレットには、

【消費者であることをやめて、愛用者になろう。買わされる人間から、自ら選んで買う人間になろう。】

【いろいろに使える重宝な器を、和食にも、洋食にも、もり替えにも、(中略) 使いそうなよい器を探そう。よい器を、いろいろに工夫して使おう。】

と、秋岡さんからのメッセージが記されています。



秋岡芳夫展  
図録より→

秋岡さんは、一器多用の具体的な例として「そば猪口」を取り上げ、自身の著書『暮らしのためのデザイン』で以下のように紹介しています。

【緑茶にコーヒーに、そしてぬた・酢の物などの器に、毎日のように使っているが、むかしの「そば猪口」は実に具合がいい。】

【「ちよく(猪口)は元来会席用の器で、晴れがましく朱塗りの器と一緒に用いた向付だった(中略)もともとハレの器だったのを、のちに、そば屋で雑器として使うようになってから「そば猪口」の愛称で呼ばれるようになる。】

「暮らしのためのデザイン」より→



そば猪口は大中小のサイズで様々な用途に使用できる他、相似形であるため同サイズは積み重なり、サイズ違いでは容れ子になる。収納に場所を取らず、置いた時の安定感は抜群。と一器多用の器として、その魅力を伝えています。

【一器多用】につながる背景とその先

1971年、日本は「一器多用」とは真逆の「大量生産・大量消費」の時代を歩んでいました。生活に溢れた多くのものは、消費されるために作られたもので、心を豊かにするとは言えなかったように感じられます。当時、手の技や手仕事の技術、地域産業の復興へと興味を移していた秋岡さんは、消費されるために作られたものや、生産性が重視された工業製品に対して、消費者の思いが希薄になっていくことを危惧していました。そんな中で生まれた「一器多用」の考え方は、生活の見直しとして、よいものを見極め、丁寧に扱い、いろいろに工夫して長く愛用することを勧め、昔の日本をお手本とした丁寧に大切に暮らすことで生まれる「心の豊かさ」「人間らしい暮らし」を気付かせてくれる言葉だったように感じます。

【いっきたよう】のいろいろ

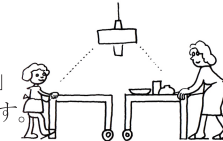
一器多用＝「限られたスペースを広く活用するために用途が限定されないものを選ぶこと」

秋岡さんが提唱した考え方「一器多用」は、器に限らず暮らしに関わる全般で使用されていました。読みは「いっきたよう」と同じく、「一机多用」や「一椅多用」などと漢字を当てはめて、著書にて紹介しています。

【一机多用】

「高さが61～63cmの大きめのテーブルなら、「一机多用」。食事・団らん・お客・一杯・書きもの、全てが一つで間に合います。」

◎一机多用なものの参考には「箱膳」が紹介されています。



【一椅多用】

「座面高38cm前後で、肘がなくて座のクッションが硬めの椅子を選べば、この椅子も「一椅多用」。リビングにもダイニングにも兼用できます。」

◎一椅多用なものの参考には、豊口克平さんがデザインした椅子「トヨさんの椅子」が紹介されています。

